

第十五回 長江に宴して曹操詩を賦す、七星壇に諸葛風を祭る

— 赤壁前夜（四）・東南の風 —

（前回から今回まで）

「赤壁の戦い」前夜、欺かれたことに気づかず勝利を確信した曹操は、諸將を招き、意気揚々と船上で大宴会を催します。そこで、曹操はみずからの来し方を振り返り、感慨が高まりゆくままに、有名な「短歌行」を歌いあげます。曹操は詩にも通じた英雄で、彼の詩は二十首余りが現存していて、「人間」曹操が何を思い、何を感じて生きたのかをうかがうことができます。

（本文抄）

南屏の山容は絵にかいたようであり、東には柴桑の境、西には夏口の入り江、南には樊山、北には烏林と、あたりにさえぎるものなく開けているのを見て、曹操は思わず喜びがこみあげ、一同に告げた。

「わしは義兵を起こしてこのかた、国家のために賊を除き悪をなすものを退治して、誓って

四方の波乱をおさめ、天下を平定しようとして願ってきた。いま残るのは江南だけだ。百万の精銳を有し、さらに諸君が忠義に励んでくれているのだから、成功は疑いなしだ。江南を平定すれば、天下は無事安泰とな。諸君とともに富貴を受け、太平を楽しもうではないか」

このとき、曹操はすでに酩酊し、槩（柄の長いほこ）を手に取って舳先に立ち、長江に酒をそそいでから、なみなみと酒を入れた盃を三杯飲みほし、槩を横たえたまま諸將に告げた。「わしはこの槩を持って、黄巾を破り、呂布を生け捕りにし、袁術を滅ぼし、袁紹をかたづけ、さらに長城のはるか北に突きいって、遼東まで到達するなど、天下を縦横に馳せまわって来た。大丈夫としての志に背かない人生だった。今、この見事な眺めを前にして、感慨もまた高ぶってきた。これから歌を作って歌うから、おまえたちも唱和してくれ」

酒むかに対まさえば当いに歌うべし 人生いくばく幾何ぞ

譬ちやうろえば朝露はなはの如し 去る日は苦はなはだ多し

慨がいして当こゝろに以て慷ゆうすべし 憂思ゆうし忘れ難し

何を以てか憂あはいを解かん 惟とこだ杜康有るのみ

青青たる子が衿せいせい きみ えり 悠悠たる我が心ゆうゆう

但だ君が為の故にゆえ 沈吟して今に至るしんげん

呦呦として鹿は鳴き 野の萃よもぎを食らう

我に嘉賓有らば 瑟しつを鼓し笙しょうを吹かん

皎皎たること月の如きも 何いずれの時に輟やむ可けん

憂いうちは中より来たりて 断絶だんぜつす可からず

陌はくを越え阡せんを度り 枉まげて用て相あひ存ぞんわば

契闊けいかつ談讌だんえんして 心こころに旧恩きゅうおんを念おもう

月明らかに星稀まれに 烏鵲うじやく南みなみに飛ぶ

樹きを遶めぐること三匝さんそう 何いずれの枝えだにか依よる可き

山やまは高たかきを厭いとわず 海うみは深ふかきを厭いとわず

周公しゅうこう哺ほを吐はきて 天下てんか心こころを帰かへす

酒を飲んだら、おおいに歌うがよい。人生はどれくらい長いというのか。たとえば朝露の

ようなもの、みるみる時は過ぎて行く。

気持ちの高ぶるままに歌うがよい。それでもつらい思いは忘れようがない。何によつてこの憂いを消し去ればよいのか。ただ酒あるのみ。

青い衿えびらの服を着た書生の諸君よ、私は久しい以前から、君たち有能な士を招きたいと、ひそかに思いつけて今日に至った。

鹿はのんびりと鳴きかわしながら、群れをなして野原の草を食べている。

私もまた諸君のような立派な客人を迎え、琴をかき鳴らし笛を吹いて共に楽しみたいと思う。

皎々と輝く月のようなあなたを、いつまでたつても手に入れることができない。だから、心の中から沸わいてくる憂いを、断ち切ることができないのである。

ところが、あなたの方から、遠い道をいとわず、わざわざたずねてきてくれた。久しぶりに大いに飲み、大いに語り合つて、かつての友誼ゆうぎをあなたためようではないか。

月はきらめき星はまばらになるころ、カラスやカササギが南へ飛ぼうとする。

だが、木のまわりを三回めぐり、羽を休める枝を探しあぐねている。

山は高いほどいいし、海は深いほどいい。むかし周公は、食事中、口ものを吐き出して

まで、訪れてきた相手を迎えたので、天下の人々は彼に心を寄せたのだ。

(解説)

曹操は宴をひらき、「短歌行」を吟ぎんじました。

「短歌行」ができた時期は定かではありませんが、『三国志演義』は、「赤壁の戦い」をひかえた曹操に、長江に浮かべた船上での宴で「慨がいして当あたに以もつて慷こうすべし(気持ちの高ぶるままに歌うがよい)」とうたわせます。

曹操が高まりゆく激情を託した「短歌行」は、古来そのスケールの大きさから、人々に親しまれてきました。

曹操はここで、人の命は限りあるもの、無常の人生に対する感慨は尽きないが、まずは酒を飲んで憂いをはらおう、と歌いはじめ、最後は、周公旦しゅうこうたんがいつたん口にした食物を吐き出してまで人材を求めた故事に託して、みずからの抱負ほうふを示して終わります。

曹操は、黄巾の乱以来二十余年、傑出した軍事指揮官として、また辣腕らつらんの政治家として、席の温まる間もなく中国全土を駆けめぐってきました。このとき曹操は、まさに天下統一を目前にし、もしも私という英雄がいなかったならば、乱世こんとんの混沌と荒廃はとどまるところを

知らなかったであろう、大丈夫としての本懐を貫いた人生だった、とこみあげる感慨を「短歌行」に託して歌いました。

曹操の詩は「樂府」とよばれる詩型で、酒席などで演奏に合わせ、即興で歌われたものです。推敲などせずに、興趣のおもむくまま一気に歌いあげられたものでした。

北宋の蘇東坡は、「赤壁の賦」において、『月明らかに星稀にして、烏鵲南に飛ぶ』とは此れ曹孟徳の詩に非ずや。（中略）酒を醸みて江に臨み、槳を横たへて詩を賦す、固に一世の雄なり」と、「短歌行」を引いて曹操の英傑ぶりを謳っています。

ちなみに、劉備や孫権は詩を作ったかも知れませんが、記録には残っていません。

この講座では省略しましたが、蔡瑁が劉備の偽の詩を作ったところを見ることがあります。その時、劉表は、劉備と長い間いっしょにいるが、彼が詩を作ったところを見ることがないと行って偽作を見抜いています。『三国志演義』は、劉備は詩作とは無縁の人物としています。

曹操は、優れた戦争指揮官・辣腕の政治家、おまけに詩想豊かな文学者と、多方面の才能に恵まれた一流の指導者でした。陳寿は曹操を「非常の人、超世の傑」と評しています。「人並みはずれた才能を持ち、時代を超えた英雄」とする、陳寿の鋭い人物洞察が光ってい

ます。

その宴席で、揚州刺史の劉馥りゅうふくが、詩の「月明らかに星稀に、烏鵲南に飛ぶ。樹を遶ること三匝、何の枝にか依る可き」が不吉だといっています。読んでいて何か唐突な感じがしますが、この句のいったいどこが不吉なのか『三国志演義』はあらためては説明しません。

金文京氏は、中国では古くから鳥の鳴き声で吉凶きつぎょうを占う習慣があり、カラスの鳴く時と方向が、争いの前兆を示すと考えられていたことを指摘されています(『三国志演義の世界』東方書店)。「烏鵲うじやく」の鳥はカラスですので、劉馥は、この句が「赤壁の戦い」での曹操の敗退を予兆するもので、不吉だと言ったのでしよう。

また「赤壁の戦い」のあと、劉備が南の長沙ちやうさに向かったとき、一羽のカラスが北から南へ三声鳴いて飛んで行ったのを、劉備が何の予兆かと聞き、諸葛亮がそれを占う場面があります。

また、荊州で劉備の息子劉禪りゅうぜんが生まれた時、一羽の白鶴はくつるが飛んで来て、四十回余り鳴くと、西の方へ飛び去る場面があります。これは、のちに劉禪が西方の蜀で四十年間皇帝の座にあることの予兆とされています。

現代でも、鳥が大群で飛び交ったり、移動したりするのは大地震の前兆と考える向きもあ

りますので、カラスに限らず鳥は、目に見える世界と見えない世界をつなぐ、象徴的な働きをすると考えられていたのでしょうか。

話は違いますが、グリム童話の「ヘンゼルとグレーテル」では、何千もの鳥が目じるしに置いたパンくずを食べてしまつて、ヘンゼルとグレーテルはどうとう森から出られなくなりまゝ。そして、お菓子の家、実は魔女の家にたどりつきます。そして今度は、魔女を焼き殺して宝物を手にいれ、森から出ようとしたときに川があつて渡ることができずにいると、鳥が川を渡してくれます。森から出れなくしたのも鳥、森から出れるようしてくれたのも鳥。洋の東西を問わず、鳥に象徴的な働きを見いだすのは、人間共通の心理に根ざしたものなのでしょう。

さて、曹操は怒つて劉馥りゅうふくを殺してしまいます。

史実の劉馥は、曹操から揚州刺史ようしゅうしとして派遣され、学校を立て、屯田とんでん・灌漑かんがい事業を推進するなど善政を布しいて、多くの流民が身を寄せています。そして二〇八年に死去します（『三国志』劉馥伝）。「赤壁の戦い」とはまったく無関係ですが、たまたま「赤壁の戦い」と同年の二〇八年に亡くなつているので、『三国志演義』はここで劉馥を引つ張り出して使つていゝのです。先の闕沢かんたくや蔣幹しょうかんなども同様です。しかも損な役ばかりなので、使われた人に

は迷惑な話です。

(本文抄)

曹操は本陣に帰ると、幕僚たちに言った。

「鳳雛ほうすう(龐統)の妙計が得られたのは、天がわしに味方してくれたからだ。鉄の鎖つなで繋ぎ合
わせた船は、長江を渡るのも平地を行くのと同じようだ」

「船が鎖つなで繋がれていれば、なるほど揺れはしませんが、もし敵が火攻めをかけてくれば、
防ぎようがありません」と程昱ていよく。

曹操は大笑いしながら言った。

「およそ火攻めには、必ず風の力を借りねばならない。今は冬の最中さなかだから、西風と北風が
吹くだけで、東風や南風が吹くはずはない。わが軍は西北の岸におり、敵軍は南岸にいるの
だから、敵が火を使えば自軍を焼くことになる。だから、何の懸念けんねんもない。もし十月の季節
なら、わしも十分用心していただろう」と。

周瑜は山の頂上から、しばらく敵の様子を眺めていると、にわかには、曹操の陣中の黄旗こうきが
風に倒され、長江に吹き飛ばされるのが見えた。

周瑜はからからと笑いながら言った。

「あれは不吉の兆きざしだ」

すると突然、はげしい風が吹き起こり、波濤はとうが岸边に打ち寄せた。一陣の風が吹き来たり、旗の端が周瑜の頬ほおを払うや、周瑜は突然、あつと一声叫ぶと、口から血を吐いて倒れた。

左右の者が彼をたすけ起こして本陣に運んだ。

諸將は、うろたえるばかりで、

「北岸には、百万の敵軍が虎視眈々こしたんたんと窺うかがっているのに、都督がこんな具合では、敵が押し寄せてきたら、いったいどうすればよいのか」

魯肅は周瑜が病氣になつてしまったので、心配でたまらず、諸葛亮に会いに行つて周瑜が病に倒れたことを話した。

諸葛亮は笑いながら言った。

「公瑾こうきん（周瑜の字）どの病氣は、私が治なおしてみせましょう」

そこで、諸葛亮にいっしょに見舞いに行つてもらつと、周瑜は頭から布団ふとんをかぶつて寝ていた。

魯肅は言った。

「おかげんはいかがですか」

「胸と腹が痛くて、時々、目まいがする」と周瑜。

「なにか薬を飲まれましたか」と魯肅。

「吐き気がして、薬がのどを通らないのだ」と周瑜。

「さきほど孔明どのを訪ねましたところ、都督の病気を治すことができると申し、いま外に来ております。診みてもらわれたら、いかがですか」と魯肅。

周瑜は入ってもらえと言ひ、左右の者の助けを借りて身を起こし、寝台の上に座った。

諸葛亮は言った。

「このところ、お姿を見かけないと思つておりましたら、おかげんが悪かつたのですね」

「『人には旦夕たんせきの禍福かふくあり（一寸先は闇いっすんさき）』なのだから、どうにもならない」と周瑜。

「『天には不測ふそくの風雲ふううんあり』と申しますが、ほんとうに先のことはわかりません」と、諸葛

亮は笑いながら言った。

周瑜はこれを聞いて、さつと顔色を変え、うめき声をあげた。

諸葛亮は言った。

「胸につかえがあるのではないですか」

「そうだ」と周瑜。

「冷やし薬をとられたらいいと思いますが」と諸葛亮。

「冷やし薬を服用したが、ぜんぜん効かないのだ」と周瑜。

「まず気を整えるべきです。気が整えば、あつというまに良くなるでしょう」と諸葛亮。

周瑜は、諸葛亮が自分の心中を見抜いているに相違ないと思い、

「気を整えるには、どんな薬を服用したらよいのか」

諸葛亮は笑いながら言った。

「私に一つ良い薬があります。都督の気を整えてみせましょう」

「どうかお教え願いたい」と周瑜。

諸葛亮は紙と筆を所望し、こつそりと十六字を書いた。

「欲破曹公、宜用火攻。万事俱備、只欠東風（曹公を破らんと欲せば、宜しく火攻めを用う

べし。万事俱に備われども、只だ東風を欠くのみ）」

書きおえると、周瑜に手渡して言った。

「これが、ご病気の原因でしょう」

これを読んで、周瑜はびっくりし、「孔明はなんと恐ろしいやつだ。私の心配を見抜いて

いたとは。ほんとうの事を言うしかない」と思った。

そこで笑いながら言った。

「私の病気の原因を知っておられる上は、どんな薬を使って治療すればよろしいか。事は急を要するので、すぐにお教えください」

「私は不才の身ではありませんが、かつて不思議な人物と出会い、奇門遁甲（きもんとんこう）（方術の一種）の書物を伝授されましたので、風を呼び雨を喚ぶ（よぶ）ことができます。もし東南の風をお望みならば、南屏山（なんぺい）に台を築いてください。これは『七星壇』（しちせいだん）というものです。台の高さは九尺で、三層の構造にし、旗を持った百二十人の兵士を周圀にめぐらせてください。私は台の上で術を使い、三日三晩、東南の大風を天から借り受けましょう」と諸葛亮。

「三日三晩もいりません。一晚の大風さえあれば、大事は成就します。戦いは目前に迫っています。遅れてはなりません」と周瑜。

「十一月二十日に大風を起こし、二十二日に風を止めるようにいたしましょう」と諸葛亮。

周瑜はこれを聞くや、ただちに病気がふつとんだ。さっそく五百の精銳を差し向け、南屏山（なんぺいざん）に壇（だん）を築かせ、さらに百二十人を選んで、旗を手に壇を守らせ、諸葛亮の指示に従わせた。

(解説)

『三国志』の注に引く「江表伝」こうひょうでんが、いちばん詳しく史実の「赤壁の戦い」を伝えますが、黄蓋が火攻めをおこなったとき、「東南の風急なり」とあり、実際に「東南の風」が吹いたことがわかります。

しかし季節は真冬、西北の風が吹く季節。本文でも、曹操に「今は冬の最中だから、西風と北風が吹くだけで、東風や南風が吹くはずはない」と言わせています。

そんな都合よく東南の風が吹くのかという疑問への答えが、この「借東風」しゃくとうふうの場面です。周瑜の病の原因は風でした。しかし普通に考えて、火攻めを決めた段階で、冬の季節に東南の風が吹かないことになぜ気づかなかつたのかが不思議なところです。しかし、そんな理屈をいうよりも、物語としての面白さを楽しみましょう。

ここで諸葛亮は、「七星壇」しちせいだんで奇門遁甲きもんとんこうの術を使い、東南の大風を吹かせましようと言います。もしここで、東南の風が吹かなければ、今までの努力はすべて水の泡あわになります。

(本文抄)

諸葛亮は魯肅とともに南屏山なんぺいざんにやって来て、兵士に命じて東南の方角に壇を築かせた。

(※ここで「七星壇」の説明があり、そして諸葛亮はその上で一心いっしんに祈ります。しかし、東南の風が吹く気配はありません。)

さて、周瑜は程普・魯肅ら武官を集めて本陣で待機し、東南の風が吹きおこれば、すぐ出動する態勢をとった。

黄蓋はすでに火船(火攻め用の船)二十隻を用意した。船内には蘆よし・葦あし・乾燥した柴を積み込んで魚油をそそぎ、その上に硫黄や焰硝えんしやうなどの引火物を敷きつめ、青い布でおおった。そのうえで、舳先へんきに青龍せいりゆうの牙旗がき(將軍の旗)を立て、船尾に走舸そうか(快速艇)を繋ぐと、ひたすら出陣の命令を待った。

周瑜は、各部隊に命令を伝えさせた。

「それぞれ船・武器・帆・櫓ろなどを準備し、号令一下、時刻どおりに出動せよ。もし遅れた者がいれば、即刻、軍法どおり処罰する」

兵士たちはこの命令を受けるや、全員、戦闘の準備にとりかかった。

だんだんと夜に近づいたが、空は晴れ渡り、そよ風すら吹かない。

周瑜は魯肅に言った。

「孔明は口から出まかせをいった。冬の盛りに東南の風など吹くものか」

「孔明が出まかせを言うはずはないと思います」と魯肅。

やがて、三更（午後十一時から午前一時の間）になるころ、突然、風の音が響いたかと思うと、旗が揺れだした。周瑜が陣幕の外に見に出たところ、なんと旗は西北方向にひるがえり、あつというまに東南の強風が吹きはじめたのである。

周瑜は愕然として言った。

「諸葛亮は鬼神もおよばぬ魔術を会得している。やつを生かしておけば、呉の禍根となるであらう。早く始末せねばならない」

急いで護軍校尉の丁奉と徐盛を呼び寄せ、「それぞれ百人の兵士を率い、南屏山の七星壇に向かえ。諸葛亮を引つ捕らえて、ただちに首を斬れ」と命じた。

徐盛は船に乗り込み、かたや丁奉は馬に乗って、南屏山へと向かった。

その途中、東南の風はますます激しくなった。

（解説）

『三国志演義』は諸葛亮を天才軍師として描きますが、ここでは軍師という枠を超えて、

まるで妖術使用のような力を發揮させます。「七星壇」を築いて天に祈禱きとうし、東南の風を吹き起こします。

第十三回の「草船借箭そうせんしやくせんの計」で、三日後の濃霧を予測し、見事に十万本の矢を手に入れましたが、そのとき魯肅が、どうして霧が出るのがわかったのかと聞くと、「天文に通じず、地の利を識らず、奇門を知らず、陰陽を暁さとらず、陣の構えを見抜けず、兵の備えに明るくなければ、役に立ちません。私は三日前にすでに、濃霧が発生することを予測していました」と答える場面がありました。諸葛亮が「天文」に通じていて、三日後の濃霧を予想したという設定です。

中国では、最古の夏かや殷いん王朝のころから、専門の天文官が天体の観測に従事しています。前漢ぜんかんでは彗星すいせい出現の記録があり、唐代には星の位置を示す図が作られ、宋代には客星（突然に明るく輝く星）、つまり超新星爆発が記録されています。その爆発の名残りが現在の「かに星雲」です。

中国の天文観察は、農業に役立てることと占いを目的にするものといわれています。つまり、自然科学の研究ではありません。しかし、占いといいいながらも天文観測をするわけですから、天文学にも通じます。

『三国志演義』は、諸葛亮が「天文」に通じているとして、用意周到に伏線を敷いているのです。吉川『三国志』は、合理的な解釈をします。

「『むかし、若年の頃、異人に会うて、八門遁甲はちもんとうこうの天書で伝授されました。それには風伯雨師ふうはくうしを祈る秘法が書いてある。もしいま都督が東南の風をおのぞみならば、わたくしが畢生ひっせいの心血をそそいで、その天書に依って風を祈ってみますが―」と。

だが、これは孔明の心中に、べつな自信のあることだった。毎年冬十一月ともなれば、潮流と南国の気温の関係から、季節はずれな南風が吹いて、一日二日のあいだ冬を忘れることがある。その変調を後世の天文学語で貿易風りゅうちゆうふうという。

ところが、今年に限って、まだその貿易風がやつてこない。孔明は長らく隆中りゅうちゆうに住んでいたので年々つぶさに気象に細心な注意を払っていた。一年といえどもまだそのなかった年はなかった。―で、どうしても今年もやがて間近にその現象があるものと確信していたのである。

『十一月二十日は甲子にあたる。この日にかけて祭すれば、三日三夜のうちに東風が吹き起りましょう。南屏山の上に七星壇を築かせて下さい。孔明の一心をもって、かならず天より風を借らん』

と、彼は云った。」

と書いています。つまり諸葛亮の「借東風」しやくとうふうは、魔術でも妖術でもなく、現在でいう気象学の裏付けがあつてのことでした。「妖術使いの諸葛亮」と「科学者の諸葛亮」をつなぎ合わせています。また黄巾の乱で、張角の弟の張宝が、妖術を使つて激しい雨と雷を呼び起こし、劉備軍を苦しめる場面があります。吉川『三国志』は、それも戦場の地形からくる特有の気象現象として説明しています。

『三国志演義』には、このような「妖術使い」が登場します。

黄巾の乱の指導者張角は、南華仙人なんかせんじんから「太平要術」たいへいようじゆつを授けられて、風を呼び雨を喚よぶことができるようになります。『水滸伝』でも、公孫勝こうそんしょうや樊瑞はんずいなど数多くの妖術使いが活躍します。

『三国志演義』や『水滸伝』はともに、本来、語り物や雑劇として民衆の中で形づくられてきたものです。その根底には中国の生きた民衆の心が横たわっています。

妖術使いは通常の間人では持つことができない能力を発揮して活躍しますが、それは、民衆の心の中にある神秘主義的なものへの憧憬どうけいをあらわしているのでしよう。

『三国志演義』は「妖術使い」のような諸葛亮を描く一方、伏線を敷いて自然科学的な解

積の余地を残しています。

さて、こうして全てのお膳立ぜんだてができあがり、いよいよ「赤壁の戦い」がはじまります。
それは、次回で。